

オープン カレッジ

人々の物語に興味を持ちライフストーリーの研究をしている筆者には、ゼミで接した学生たちもまた、研究対象になっていく。ここでは、1989年から勤めている女子大学の学生たちの「声」に耳を傾けながら、女性の生き方の変化について考えてみたい。

ゼミの一期生は、1990年に卒業した。バブル崩壊前の当時の学生たちの就職活動について尋ねたところ「就活を始めたらずいぶん数社から内定をもらって、どこかの会社に就職するか悩んでいます」と答えが返ってきた。その当時の学生た

変化する女性の就活と働き方

事を辞めることが、常識であったように思う。退職後は、専業主婦になり、子どもがある程度の年齢に達したらパートで働き、「103万円の壁」を意識し、夫の扶養家族になる女性が多かった。その専業主婦だった学生も、5代になった今では「娘には、仕事して経済的自立をしてほしい」と願い、娘の就職活動を応援するように、考え方が変化していき、女性も労働市場に参入していく時代へと変化しているのを感じる。

10年ほど前、ゼミ生の就職活動についての「声」をまとめ「就活女子」(2013年)を執筆した。その当時の学生たちの就職活動は、バブル時代の学生とは大きく異なり、簡単なものではなく、会社説明会の参

つていた。女性もキャリアを継続する時代になった。今年のゼミの学生にも就職活動について聞くと、その状況は、10年前よりもっと厳しく、30社以上も面接したという学生もいることを知った。その学生たちに「就職していつまで働きますか」という質問も投げかけてみた。今の学生たちは「寿退社」を考えることなく、出産後も仕事を辞めず、産休・育休を取って働きたいという希望を持っている。

授業で、濱口桂一郎「働く女子の運命」(2015年)を取り扱い、女性が、労働市場でいかに不平等に扱われているかを理解した上でも働き続けたいという学生たち。また、中野田佳「『育休世代』のジレンマ

学生たちの

「声」から

ちの「働く」といふことへの考えは、あくまでも結婚までの「腰掛け」に過ぎず、簡単に就職し、数年たてば、結婚を機に「寿退社」で仕



榎山女学園大学
国際コミュニケーション学部教授
塚田 守

加から始まり、エントリーシートの提出、最終面接までの数か月に及ぶ厳しいプロセスだった。そのような厳しい就職活動をがんばっていたのは、自分の夢見たい仕事、希望した仕事に就き、長く働きたいという強い意志を持っているようだった。「給料の良い男性と結婚して専業主婦になるのが夢」という学生もいたが、彼女たちは、あくまでも少数派で、女性の労働市場への参画は、当然のことになる。

女性活用はなぜ失敗するのか?」(2014年)も授業で学生たちと取り扱い、育休制度が成立した後のエントリー女性たちのジレンマについても一緒に考えることがあった。共働き世帯が、専業主婦世帯よりもはるかに多くなっている現在でも、藤田結子「ワンオペ育児」(2017年)が女性に共感を持ってよく読まれているほど、家事・育児については、女性に負担が大きい現実がある。企業の労働状況が変化し、夫である男性の働き方が変わっていく必要があるのは、もちろんであるが、働く女性たちにとってもより良い労働環境を作っていく社会になることを、女子大に勤める一人の教員として願っている。

つかだ・まもる ライフストーリー研究、社会学。ハワイ大学大学院社会学研究科博士課程修了。博士 (Ph.D. in Sociology)